

撮 取 不 捨

『観無量寿経』に、お釈迦さまが韋提希と阿難に、極楽の光景をまのあたりに見るための瞑想法を説く場面があり、第九の観「真身観」(無量寿仏の真のおすがたと光明を想い描く)に、「無量寿仏・有八万四千相・一一相・各有八万四千・隨形好・一一好・復有八万四千光明・一一光明遍照・十方世界・念仏衆生・撰取不捨」と出てきます。現代語訳をみてください。

「また、無量寿仏のお体には八万四千の勝れたところがあり、それぞれにはまた八万四千の細かな特徴がそなわっている。さらにそれぞれにまた八万四千の光明があり、その一つ一つの光明は広くすべての世界を照らして、仏を念じる人々を残らずその中に撰め取り、お捨てることのないのである。」となっており、この経典の中に「撰取不捨」が出てきます。

「撰取不捨」(光明の中に撰め取って捨てることのない)とはどういうことなのでしょう？私の念仏の歩みを交えながらお話しさせていただきます。

思えば子どもの頃から、役に立つか立たないか・出来るか出来ないかで物事の価値を決めようとする世間の評価にさらされて、私はどちらかというと、役に立たない・出来ない部類でありました。学校生活や社会生活においてその評価にさらされて自己肯定感を持てず、自己の存在意義を見失うこともありました。仏法に出会うまでは心の拠り所もなく、常に周りに気になっておりました。そんな私ですから、仏法に出会った頃のお念仏は、何か物事で失敗した時、怒られた時に「ナマンダブ・ナマンダブ」と申しておりました。つまり私に起こった災難を消すために「お助けを・お助けを」と七難消滅の誦文でしかなかったのです。阿弥陀様を目の前に想い描き「阿弥陀様、助けて」というものでした。

本徳寺のお朝事は和讃を繰り返すのですが、時々、「あつー」と思う和讃に出会う事があります。

「南無阿弥陀仏をとふれば 四天大王もろともに よるひるつねにまもりつつ よろづの悪鬼をちかづけず」

この和讃に出会った時、目の前に阿弥陀様を想い描くのではなく、私の後ろに阿弥陀様がいらっしやうて私を見守りながら私の心をお育てくださるのだと気付きました。私の「ナマンダブ」は「助ける・助ける。だからお前は安心しなさい。」へと変わっていったのであります。しかし、そう領解させていたきながら、世間の評価にさらされて、自己の存在意義を見出せず「私は何者か」ということがわからずいました。

そのような心持ちの中での出来事ですが、私を可愛がってくださるお客さんに商品を納品した時のことです。「値段が高い」と頭ごなしに言われました。私は、カーッとなつて、「だつたら、安いところへ頼んだら」と言つてしまいました。言つてしまつた後で、少し冷静になり、フオーロウする言葉を見つけてその場をしのぎましたが、かなり後味の悪いものになりました。

カーッとなつたその時には、「よろづの悪鬼をちかづけず」のお念仏は出てこなかったのです。帰り際、何だか悲しくなり車の中で「ナマンダブ・ナマンダブ」と称えていました。七難消滅の誦文の「ナマンダブ」が出てきたのです。「お助けを・お助けを」と、常に私の後ろにいて私を見守りながらよろづの悪鬼をはねつけようとする私の心をお育てくださる阿弥陀様がどこかへ行つてしまつたのです。



参拝記念証

たのです。

「ナマンダブ・ナマンダブ」と念仏し、「助ける・助ける。だからお前は安心しなさい。」と領解しながらも、「私は一体何者なのか」「何のために生きているのか」がわからない日々を過ごしておりました。

あるお朝事で「釈迦の教法おほけれど 天親菩薩ばねんごろに 煩惱成就のわれらには 弥陀の弘誓をすすめしむ」という和讃に出会いました。この和讃を詠んだ時、「私の事を言っている」と感じさせていただきました。

一つは「釈迦の教法おほけれど」です。お釈迦様はたくさんの方をお説きになられました。しかし私にはなぜ「阿弥陀仏」をお説きになられたのが永らくわかりませんでした。

もう一つは「煩惱成就のわれらには」です。普通に言えば「煩惱にまみれた我らには」となるのでしょうか、親鸞聖人は「煩惱成就のわれらには」とお示しくださっております。「煩惱成就」について聖典註釈版580頁の脚註

に「あらゆる煩惱を欠くことなくそなえていること」と記されております。「煩惱」とは苦しみを生みだす精神作用であります。「まみれる」とは、一面に汚らしい感じについていることや困った状態を表します。どちらも一般的な常識の善い・悪いで言えば、悪い部類に入ります。ですから、普通に言えば「煩惱にまみれた我らには」となることなのでしょう。一方「成就」は、願いがかなうことや物事が望んだとおりに完成することで、こちらは善い部類に入ります。「煩惱」と「成就」この相反するものを一つにまとめられたのは、現実を肯定した表現なのだそう。普通に考えれば、煩惱を取り除かなければいけないのですが、我々には煩惱を取り払う事はできません。逆に「あらゆる煩惱を欠くことなく備えている」この事こそが私たちの本質である。と親鸞聖人は味遇われたのだと思います。

「煩惱成就のわれらには」を詠んだ時、「私自身のこと」と感じさせていただきました。そして、「弥陀の弘誓をすすめしむ」は私のために勧めてくださいるのだと思いましたが、煩惱成就はたくさんの方の法をお説きになられました。私のお念仏が、「お助けを・お助けを」から「助ける・助ける」へ、そして「生きよ・精一杯生きよ。決して見捨てることはない」へと変わっていったのであります。

私のような役に立たない・出来ない、自己肯定感を持てず、自己の存在意義を見出せない者こそが、阿弥陀様のお目当てであったのだと気づかされました。だからこそ、阿弥陀様は、私を光明の中に撰め取って、決して見捨てることはないとおっしゃっておられるのです。その時、ほんの少し、自己の存在意義「私は何者か」が見えてきたように思えます。

歎異抄の後序に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり、されば若干の業をもちける身にありけるを、助けんと思し召したちける本願のかたじけなさよ」と示めされているお言葉を、そのまま「私一人を助けんがための本願であった」と領解させていただけになるようになりました。そして「撰取不捨」(光明の中に撰め取って捨てること)に預からさせていたたく日暮らしへと変わっていったのであります。このような心持ちに至るまで、長い道のりでした。しかしそれらすべて阿弥陀様のお手まわしであったのでしよう。合掌